

コーパスを使った第二言語習得

田淵 龍二（ミント音声教育研究所）

1. はじめに

映画やビデオは、楽しく面白い筋書きに、表現もわかりやすくて納得できるものであることから、言語習得に有効である。そこで、ある表現が示す動作や状態の映像を、臨場感と説得力のある用例として提示する有効性に注目した。

2. 目的

表現 **come up to** を使えるようするとともに、長期的には、語彙運用の自律的解決能力を獲得するとともに、そのための手段として、コーパス活用法習得を目的とする。授業対象は中高生以上とした。

3. 方法

映画「On The Town（踊る大紐育）1949」のテーマを象徴するシーンの一つにある英語表現 **Come up to my place.** の真意（語感）を映像コーパスで研究する。具体的には、(1) まず映画コーパス **Seleaf** で **come up to** をト書き検索し、(2) 次に対訳コーパス **CORPORA** で **come up to** と **come to** の違いを共起語の統計的解析で比較し、表現特性を調べる。

4. 結果

(1) **Seleaf** ト書き検索では 13 シーンがヒットした。いずれも人物 A が人物 B に近寄って話しかけたりしていた。

(2) **CORPORA** では **come up to** が 110 件、**come to** が 1713 件ヒットした。それぞれ右共起語を調べたところ **and** と **say** が目立って頻出していた。その様子を表 1 と図 1 にまとめた。右共起語とは検索語の右側に続く単語のことである。

表 1. **come up to** と **come to** の **and** と **say** の右共起率（右は **go** の場合）

	come up to	come to	go up to	go to
ヒット数	110	1,713	75	11,938
and 右共起数	48	158	13	809
共起率	44%	9%	17%	7%
say 右共起数	32	54	5	162
共起率	29%	3%	7%	1%

メモ：コーパスは **CORPORA** 収録の TED Talks. 右共起した **and** が複文の **and** か否かのチェックはしていない。

出現頻度は **come to** が 16 倍と多かった。**come up to** と **come to** はどちらも“～に近寄って来る”の意味合いであるが、右共起語 **and** と **say** の出現率では **come up to** が **and** で 5 倍、**say** で 10 倍多くなっていた。参考として類似表現である **go up to** / **go to** についても調べたところ出現頻度は **go to** が圧倒的（159 倍）に多かった反面、右共起語出現率では **go up to** が **and** で 2 倍、**say** で 7 倍となった。

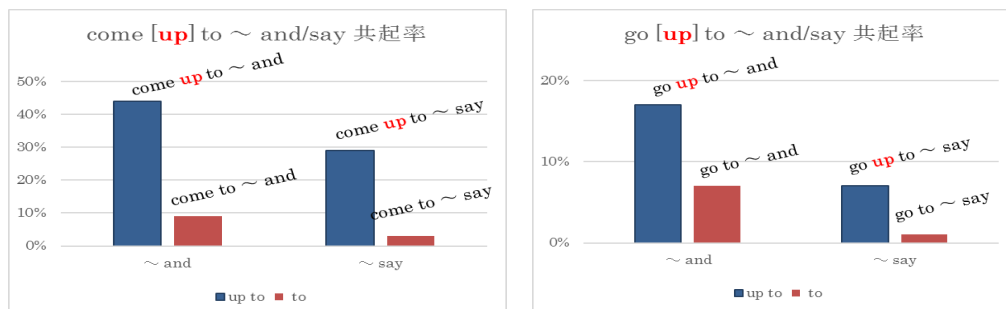


図 1. come [up] to ~ and/say 共起率 (右は go [up] to の場合)

5. 考察

辞書では外国語を母語で字句解説するにとどまるため、たとえ用例があっても利用場面を想像することは容易ではない。しかも多義であれば混乱もする。まして come up to のような語句は掲載されてない場合が多い。他方 BNC のようなコーパスで多くの用例から語句の意味 (語感) をつかむことは可能であるが、初級者には言葉の壁があり、上級者でも時間に余裕があるとは限らない。

言葉を言葉で解説する辞書の限界を補完するものとして、映像コーパスの役目は(1)で見たように、字句の意味を含む場面 (文脈かつ非言語) で提供できることから、初級者にも意味をつかみやすい。このように「言語が発せられる現場に立ち会う」手法は母語の獲得過程と似ていることから、同じ場面や状況に遭遇した時の運用力が期待できる。

他方で、経験と感覚での質的理解は誤解 (理解の幅) を生みやすいことから、指導者 (教師) の視点からは、字句運用の正確さと多様さを担保するためにも、(2)で見たような量的比較調査をすることが望ましい。学校教育にあっては指導内容が一面断定的あるいは定型的 Yes/No (○/×) になりやすいが、コーパス用例を見聞することにより、実態に即した教育が保証されるであろう。

教育における機会の増大 (一般教養) と専門性の要求 (専門教育) の背反性が高まる時代にあつては、個々人の自律的学習がより重要になる。したがって、疑似体験(1)と統計的視点(2)を合わせて指導することが肝要であろう。辞書を引くように、コーパスを引く技能教育をともなった英語教育がこれからの課題である。

6. 限界と対策

利用したコーパス Seleaf と CORPORA は映画 (名作) と講演 (TED) の分野コーパスである。他分野あるいは均衡コーパスでの検証が必要である。

7. 終わりに

この研究は、ATEM SIG (Special Interest Group) 研究の一環である。時間 (字数) の都合もあり文化面での come up to 研究はさわりだけとなった。

参考

Seleaf: 映画映像コーパス. <http://www.mintap.com/ns/h3/> ミント音声教育研究所
CORPORA: 日英対訳映像コーパス. <http://www.mintap.com/talkies/pac/> ミント音声教育研究所